

## The 2nd IAGG Master Class on Aging in Southeast Asia に参加して

山梨 啓友

(日老医誌 2019; 56: 541)

2019年5月27~29日にフィリピンのマニラにある St. Luke's Medical Center で開催された IAGG Master Class に参加させていただきました。今回の研修コースには、Jean Pierre Michel 教授をはじめとして東南アジアの各国の指導者や多くの老年医学レジデントが参加していました。3日間の日程で、系統講義、ケースシナリオ学習、プレゼンテーション、研究発表など豊富な内容であり、大変に学びの多いコースです。

自分は臨床医として日々高齢者のケアにあたっています。その中で、特にサルコペニアとフレイルは重要な健康課題であると思っております。こうした臨床経験を踏まえて、2014年に当院で離島における前向きコホート研究が立ち上がった際にサルコペニアとフレイルを重視したデータ収集と分析を始めました。この研究では、もともと健診受診者の動脈硬化症の発症機序とその予防を主眼にしており、動脈硬化の指標である頸動脈内膜中膜複合体厚を測定しておりました。アジアにおけるサルコペニアの研究を行いたいと考えていたため、ロンドン衛生熱帯医学大学院が南インドのハイデラバード市で展開している前向きコホート研究 Andhra Pradesh Children and Parent Study と共同研究を行って、動脈硬化指標と筋力との相関を示し、Geriatrics & Gerontology International で発表させていただきました (Geriatr Gerontol Int. 2018 Jul;18(7):1071-1078.)。

また、このコホート研究データを用いて、持続感染症である HTLV-1 ウイルス感染が動脈硬化の指標である頸動脈内膜中膜複合体厚と関連があることを示しました (Clin Infect Dis. 2018 Jul 2;67(2):291-294.)。現在は持続感染症が慢性炎症を介して動脈硬化性病変の進展、さらにはサルコペニアとフレイルを進行させる可能性について



アジア各国の参加者らとの懇親会

検討したいと考えています。

今回マスターコースに参加することで、サルコペニアとフレイルに関する最新の知見を知ること、各国の参加者と交流することで新たな研究ネットワークを構築することができました。特に印象深かったのは、研究発表のセッションで、一同の前で上記の内容について「Atherosclerosis, chronic infection and sarcopenia」というタイトルで発表させていただく機会をいただくことができました。

マスターコースは、若手研究者にとって、多くの学びがあり、良き指導者や友人と巡り会う非常に貴重な機会であると思います。末尾になりますが、研修会の運営にご尽力いただいた Miguel Ramos 教授ら IAGG の先生、ご支援をいただきました日本老年医学会に深く感謝いたします。ありがとうございました。